●せいてん質問箱

悪人とはどのような人？

●質問●

『歎異抄』には親鸞聖人の教えとして悪人正機が説かれますが、本当に悪人の方が救われるのでしょうか？

□『歎異抄』第三条

『歎異抄』の第三条には、

善人なほもつて往生をとぐ。いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはく、「悪人なほ往生す。いかにいはんや善人をや」。この条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり　（八三三頁）

とあり、悪人正機つまり悪人こそが如来の救いの目当てであるということが示されており、親鸞聖人の教えの特色を示すものとして有名です。しかし、近頃は法然聖人について書かれた『法然上人伝記（醍醐本）』にも同様の内容のものがあることから、法然聖人もまた同じようなことを述べられていたと考えられています。いずれにしても浄土の教えの特色を表す言葉であることは明らかです。

□「悪人正機」の悪人とは？

それではこの「悪人」とはどういう人をいうのでしょう。『法然上人伝記（醍醐本）』を見ると、「譬へば、本は凡夫のためにして、かねて聖人のためといふがごとし」とあり、おそらくそれは、法然聖人が『選択本願念仏集』に引かれている元暁の『遊心安楽道』に、

浄土宗の意、本凡夫のためなり、兼ねては聖人のためなり　（七祖一一八五頁）

とある文がもとであることを指しているものと思われます。

『法然上人伝記（醍醐本）』を見ると、「凡夫の善人」と「罪悪の凡夫」とありますから、浄土の教えを受けるものは、まず聖人と凡夫とに分れ、さらにその凡夫について、善人と悪人とに分れるということになります。もう少しよく見ると、「自力をもて生死を離るべき方便ある善人」「極重悪人にして他の方便なき輩」とあり、ここでは自らの力で迷いの境界を離れることができるかそうでないか、ということが問題になっていることがわかります。

□善悪という価値判断

そもそも私たちはどのようなことを善といい、悪といっているのでしょうか。基本的には善悪とは行為に対する価値判断の言葉の一つです。私たちは色々なことに対してその価値を判断します。例えば虫についても「害虫」「益虫」といった言い方をしますが、虫自体は益をなそう、害をなそうとして生きているわけではありません。しかし農作物を食べて人間が被害を受ければ害虫と呼ばれますし、逆にバクテリアなどを食べて農作物の成長を助けて人間が利益を得れば益虫と呼ばれます。つまり益・害という判断は、草を食べている虫自体ではなく、その結果について人間の基準で人間が行っているのです。

よく考えれば、私たちの周りの価値判断というのは、行為をなしたもの自身が行っているのではなく、第三者によって第三者の基準で行われていることがほとんどだといってよいでしょう。しかし少し思慮分別のある人であれば、自分の価値基準が普遍的ではなく絶対のものではないということを知っています。簡単にいえば、自分にとって都合がよければ善であり、都合が悪ければ悪であると決めつけることも往々にしてあるのです。しかしその都合というのも、自分の置かれた状況によってコロコロと変ってしまいます。

□仏教でいう善悪

それでは仏教でいう善悪とはどのようなことなのでしょうか。仏教で善悪という場合にも、それが価値判断であることはいうまでもありません。仏教で一般的に善悪という場合には、自他の上に安穏な状況をもたらすような行いを善と呼び、自他の上に安穏でない状況つまり苦悩を生じさせるような行いを悪と呼んでいます。そしてその行いをなすものは自分自身に他なりません。

それでは、私たちははたして安穏という状況にあるのかというと、釈尊が「一切皆苦」と示されるとおり、私たちは迷いの世界にあり、苦しみ悩みをかかえて生きているのです。それはさとりの側から、私の本当のありようとして突きつけられているのです。私のありようが苦か楽か、安穏かそうでないか、それもまた私たちが判断していることに違いはありません。しかし、コロコロと変る私の都合や第三者の基準において判断されているわけではなく、さとりの側から絶対の基準をもって私のありようが示されているところ、そしてそのように私たちが今迷いの世界にあるという事実について、自分自身の行いにその原因を見ていくところに、仏教の大きな特徴があります。

□「悪人」とは私自身のこと

『法然上人伝記（醍醐本）』では「自力をもて生死を離るべき方便ある善人」「極重悪人にして他の方便なき輩」とありました。私たちは自身の力で生死すなわち迷いの世界を離れることができず、そして私たちが今迷いの境界にいるということは厳然たる事実です。親鸞聖人が求められたのはまさにその「生死出づべき道」（八一一頁）なのでした。

そして「罪悪」という場合の「罪」という言葉も、私たちが日常に用いている「罪」ということと少し異なります。一般に罪といえば、社会に対する罪、あるいは神に対する罪ということですが、仏教で罪ということを考えるときには、私自身が今、迷いの境界にあるということ、あるいはこれからも迷いの世界を離れることができないということに対し、その状況を生じさせている私自身の行いを「罪」と呼ぶのです。

『歎異抄』第一条には「罪悪深重・煩悩熾盛の衆生」（八三一頁）という言葉が出てまいりますが、「煩悩熾盛」の「煩悩」とは私を煩い悩ませているものであり、「熾盛」とはその煩悩が燃えさかっているということです。煩悩とは何か、一言でいえば私たちが自分を中心にしかものごとを見ることができず、さまざまなものにとらわれ、はからい悩むことです。そのありようが「煩悩熾盛」であり、迷いの境界を抜け出すことのできない「罪悪深重」のものといわざるを得ないのです。

「悪人」とはそのように燃えさかる煩悩の中でしか生きていくことができず、自らの力では迷いの境界を抜け出すことなどできない私たち自身のことなのです。その罪悪深重、極重悪人としかいいようのない私を救おうとして如来さまは御本願をおこしてくださった、それが「本願他力の意趣」であります。ですから「悪人正機」とは、善人より悪人の方が救われるのか、というよりも、この私自身が救われるか否かという問題なのです。そしてその罪悪深重の私を救おうとして如来さまは御本願をおこされた、そのことを親鸞聖人は「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」（八五三頁）とよろこばれたのです。

（本願寺派司教　安藤光慈）